

時間・空間・人を つなぐ拠点 プラットホーム化する 芸術文化施設

国内外の貴重な文化、芸術に触れることができる美術館や博物館、そして劇場。昨今、その機能、目的が変わりつつある。鑑賞するための「箱」としての施設から、多様な芸術文化活動を推進する拠点へ。活発なコミュニケーションを生み、情報を発信する「場」と「機会」を提供するプラットフォームに生まれ変わる芸術文化施設がある。

今回訪ねたのは、地域のランドマークとして確かな存在感を放ちながら、芳醇な芸術を抱き、更にその先の使命に挑む三つの施設だ。時代の変遷に呼応しながら生まれ変わる芸術文化施設に迫る。





池袋駅西口のランドマークにふさわしい外観。建物の外部と内部を建具、ガラスパネルで仕切り、アトリウムを内部空間として明確に自立させた。

人々に親しまれているが、演劇や舞踊、演芸といった多種多様な舞台芸術を世界に発信していくにはハード面から対応が難しい。更に幅広く対応できる施設を造ろうと一九七〇年頃から議論が重ねられ、一九八二年に基本構想がまとまり、五年後に着工、一九九〇年



公益財団法人 東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 副館長
高萩 宏
Hiroshi Takahagi

池袋駅西口を出ると目の前に巨大な矩形のガラス屋根が見えてくる。東京芸術劇場、通称「芸劇」のエントランスだ。建物の入口の外に小さな人だかりができていた。東京芸術劇場が企画するイベントだ。陽光の下、大道芸人のパフォーマンスに観客の笑い声が上がっている。必要以上に派手な演出はせず、簡易な椅子を並べただけ。演者と観覧席の垣根は低く、輪の中央に誘われた観客が大道芸人と一緒にな

総合芸術の
発信拠点を
目指して

し、一九九九年を収容するコンサートホールをはじめ、プレイハウス、シアターイースト、シアターウエストといった四つのホールを備え、展示室や会議室、リハーサル室も併せ持つ複合的な総合文化施設だ。
この施設は二〇一一年四月から二〇一二年八月にかけて全面的な改修工事を行った。リニューアルから六年が経過した今、東京芸術劇場はどのような段階を迎えているのか、高萩宏副館長にお話を伺った。「施設や設備の老朽化対策が大改修の主たる目的ですが、芸術文化のみならず、新たな文化を発信する拠点としての機能の見直しも大きな課題となる改修でした。時代の要請に応え、より自立的な施設として生まれ変わる必要があったのです」。

東京芸術劇場が開館する以前、東京都は上野公園内の東京文化会館を有していた。一九六一年に完成したこの会館は、クラシックを中心とした音楽やバレエも行う本格的なホールだ。現在に至るまで日本の名門ホールとして多くのに竣工したのが東京芸術劇場だった。目指したのは独自性の高いイベントの開催と、自主運営だ。「ハードとしては日本の建築技術の粋を集めた立派な施設でしたが、ソフト面においてそれまで劇場や施設が自主運営するモデルがありませんでした。特に演劇や舞踊分野においてほとんどが貸館、つまり貸し出される施設として運営されていた。『誰がどのように使うのか』といった議論がなされる土壌が十分ではなかったのかもしれない」と高萩氏は心中を明かす。新たなイベントを開発する予算も潤沢ではなかった。東京芸術劇場は貸館としてのスタートを余儀なくされた。それでも、ルネサンス・バロック面と、モダン面の二面を持つユニークなプレイホールや、八〇〇余席で演劇やミュージカルを堪能できるプレイハウス、演劇から落語まで幅広く対応できる二つのシアターは高い支持を得て、国内有数の複合文化施設として、日本の芸術発信をリードし続けた。

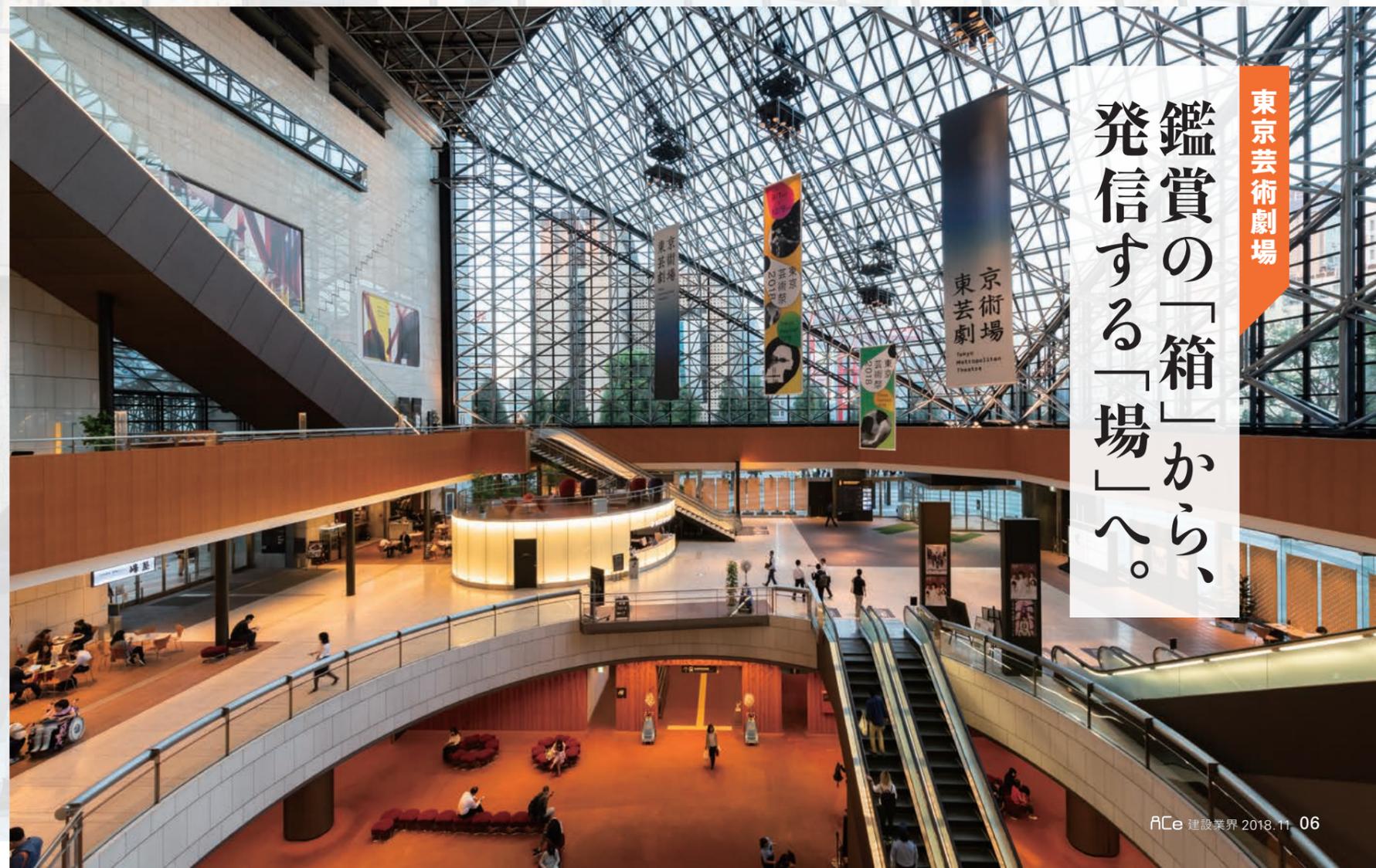
発信型、自立型の施設を
再構築

開館から二〇年を迎えるにあたり、施設や設備の経年劣化が顕著になってきたことから改修計画が浮上する。二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピック誘致を見据え、日本の芸術、文化レベルの高さをアピールする狙いもあった。二〇〇八年に改修計画が決定する。そのコンセプトの一つ「発信型の運営」が可能な施設としての改革だった。開館当時の理想を実現する施設の再構築だ。東京芸術文化評議会「都立文化施設あり方検討会」が組織され、ここで利用者、職員から寄せられた六〇〇項目もの検討材料が示された。高萩氏が当時の中間答申の資料を見せてくれた。施設の現状と課題の項目に「劇場としてのイメージの貧弱さ、発信力の不足」「寂



劇場前広場では各種催事が行われる(左)。コンサートホール前のスペース(アート広場)も落ち着いた雰囲気。これから始まる名演に向けた期待感を醸成する(上)。

地下のシアターから最上階まで吹抜け空間になっている東京芸術劇場の内部。かつて1階から5階のコンサートホールを直接つないでいた中央部のエスカレーターを外周部に配置し直すことで、アトリウムの大空間が持つ存在感を最大限に生かした。奥村組・近藤組JVが約1年半の大改修を担い、「ゆっくりと滞在できる空間」として生まれ変わった。



鑑賞の「箱」から、
発信する「場」へ。

東京芸術劇場



コンサートホールの内部空間(上)のコンセプトは「豊かな響き」「快適な演奏・鑑賞環境」。壁面にリブを施すことで、ステージからの音が客席に向け柔らかく響く。プレイハウス(中)は演劇からミュージカル、舞踊にまで対応する中ホール。約60人規模のオーケストラピットを備えている。シアターイースト(左下)は舞台と客席が対面するエンドステージや、舞台の3方を客席が囲むラストステージなど多様な舞台形式に対応する。シアターウエスト(右下)には客席から舞台を額縁で区切るように見せる仮設プロセニウムパネルを備えている。(いずれも写真提供:東京芸術劇場)



次世代の舞台表現者を育てる「東京演劇道場」(左)や、東京の芸術文化の創造・発信を目指す都市型総合芸術祭である「東京芸術祭」(右)など、芸術文化醸成のためのプログラムを展開中だ。

う機能を有しています。劇場もそうあるべきではないかと考えています」。そのため東京芸術劇場では、音楽大学を卒業したものの、楽団に所属せずにいる若手がプロを目指し経験を積むことができる「芸術ウインド・オーケストラ・アカデミー」を行っている。プロデューサーやコーディネーター、舞台技術者を育成する研修プログラムもそうした活動の一環だ。「現

在も東京芸術劇場には、地方から多くの若手がスタッフとして参画しています。彼らがここでキャリアを積み、地方に戻った時にその力を存分に発揮してくれることを楽しみにしています。作品と人、人と人との出会いを組織する、そんな施設でありたいと努力をしています」と前田氏は話す。

更に、子どもや日常的に芸術と触れる機会が少ない層でも訪れやすいワンコインコンサートやフェスティバルを開催。最近では地域の催事にも積極的に参加し、賑わいの創出と地域との連携を強化している。「ターミナル駅に近いという立地を生かし、地域や地方とつながりに連携していきたいと考えています」。東京芸術劇場は音楽好き、演劇好きの人たちだけのための施設ではないと、高萩氏は話

池袋駅西口界隈は戦前「池袋モダンパルナス」と呼ばれるほど画家や芸術家の卵、文化人たちの交流の場で、東京の文化、文教をリードするエリアだった。しかし、戦後は闇市が生まれ、長い間その暗澹としたイメージを払拭しきれずにいた。近年その印象が変わりつつある。ここを訪れた時の、大道芸に沸く風景も日常のものとなるかもしれない。この施設はもはや鑑賞を目的とした「箱」ではない。あらゆる人が芸術文化を享受できる拠点として、生まれ変わった東京芸術劇場がその変革に大きく関与していくことは間違いない。



東京芸術劇場のシンボルともいえるパイプオルガン。改修時には分解と点検、清掃が行われた。一台で異なる時代の音色を奏でる構造は世界でも類がない。(写真提供:東京芸術劇場)



公益財団法人
東京都歴史文化財団 事業企画課
東京芸術劇場 広報営業係長
前田圭蔵
Keizo Maeda

しく、がらんとした、無機質な雰囲気」「『別世界』『非日常性』『ホスピタリティ』の演出不足」といった厳しい文言が並ぶ。しかし、こうした意見をあえて組上に載せるところに改革の本気度がにじんでいる。「寄せられた意見をもとに専門家を招聘し、およそ二年間にわたって議論を繰り返しました。その結果、不必要な設備は大胆に省略する、逆に欠かせない要素は強化することを前提に改修に取り組みました。二〇〇九年には初めての試みとして芸術監督に演出家の野田秀樹氏を迎え、文化の創造、発信力、存在感は大きく高まりました。現在までに、見違えるほど改善されたという声が多く寄せられています」と高萩氏は胸を張る。ハード面においては、開館当時の志を更に高度なレベルで形にする建築技術の進歩も大きいと話す。

独自性を強化しながらも貸館としての機能も維持した。高萩氏はこう言葉をつなぐ。「欧米の劇場には自主運営という概念が定着しています。当劇場のように貸館と自主性を両立する施設は珍しい。海外から視察に見えた方から『なぜ施設を貸すことで利益を出せるのか? 教えてくれ!』と聞かれることもありませよ」と笑った。

東京芸術劇場は現在、そのミッションとして四つのコンセプトを掲げている。「芸術文化の創造・発信の拠点」に加え「人材育成・教育普及の拠点」「賑わいの拠点」「国際文化交流の拠点」といった「プラットフォーム」としての劇場の構築だ。事業企画課の前田圭蔵係長がこう説明してくれた。「美術館や博物館は、芸術や貴重な史料を『鑑賞』するための装置として劇場に近似しています。そうした施設では所蔵するものを研究したり、その成果を発信したりする、例えば研究室や学芸員とい

**鑑賞するための「箱」から
発信、交流する「場」として**

至宝の山を 守護する博物館。



富士山を守る博物館

富士山が世界遺産に登録されたのは二〇一三年六月のことだ。静岡・山梨両県の自然保護グループでつくる「富士山を世界遺産とする連絡協議会」が発足したのは一九九二年。実に二一年の紆余曲折を経た悲願成就だった。世界遺産としての正式名称は「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」だ。自然遺産ではなくあくまで文化遺産として登録されている。

遺産の構成資産は富士山域をはじめ、これを取巻く登山道、湖沼、神社、遺跡群など二五件に及ぶ。遺産登録とともに課せられたのは、ただ単に観光客の誘致、経済振興にとどまることなく、世界遺産としての価値を守り、未来に向け恒久的に伝えていくという使命だ。その拠点となる博物館がある。



静岡県富士山世界遺産センター副館長
落合 徹
Toru Ochiai

静岡県富士山世界遺産センターだ。博物館という施設に位置付けられるが、その活動領域は多岐に及ぶ。落合徹副館長にセンターのコンセプトをお聞きした。「『永く守る』『楽しく伝える』『広く交わる』『深く究める』という四つがこのセンターの基本方針です。富士山の世界遺産登録を推進する過程で、すでにセンターの設置は盛り込まれていました。設計のコンセプトは『水の循環』。正面の水盤はそのシンボルですが、富士山に降り積もった雪が地下水となって広がり、その湧水がこの地域と、海までをも支えていることを表現しています」。オープンは昨年十二月。JR富士宮駅から徒歩約十分、浅間大社の南側に位置する。もともとは富士宮市が整備した観光駐車場だった。周辺は家屋や商店が連なる閑静な住宅街だ。そこに敷地面積約六、〇〇〇平方メートルの圧倒的な存在感をもって誕生した。設計は(株)坂茂建築設計、施工は佐藤工業・若杉組JVによる。

施設は展示棟、北棟、西棟の三棟からなる。中央にそびえる五階

います。そこが他の博物館とは少し異なるところかもしれませんね」と落合氏は説明する。富士山の本当の価値を理解することによって、この山を守ろうという意識が醸成される。そのため登山シーズンには誘導サインの確認、マナーや安全の指導、登山者数の管理など、行政的な業務にも深く携わっているという。

畏敬の念から生まれる 山を守る意識

服すること」という捉え方をすると西洋では見られない思想です。日本人の根底にある山に対する感謝と畏敬の念を今一度呼び覚ますことにより、この山を大切にしようとする心が生まれます。そのため展示であり、研究成果の発信なんです。富士山の価値、畏敬の念を知らずして、大切にしようとする心は生まれないと、落合氏は繰り返し言葉に力を込めた。

富士山の普遍的な価値を伝える。

そのために最も重要な要素となるのがこの山に対する畏敬の念だ。富士登山が庶民にも一般的になったのは江戸時代のこと。古来、富士山は信仰の対象だった。富士山を信仰する人々の集まり「富士講」が各地で結成され、そのなかで何年も掛けて資金を積み立て、代表を選び、富士登山を目指したという。行楽よりは参詣、巡礼の意味合いが強かったのだろう。落合氏はこう説明する。「山を御神体と位置付け、信仰の対象とする日本人の概念は、登頂を『山を征



建物の最上階、展望ホールとテラスは遮るものがない絶好の富士山のビューポイントだ。壁面全体に開口部、ピクチャーウィンドウを設け、ガラス越しに季節ごとの富士山の雄姿を一枚の絵のように切り取って見せる。(右/写真提供：富士山世界遺産センター)



圧倒的なインパクトをもって来館者を魅了する外観。水深3cmの水盤が「逆さ富士」を演出する。木格子には「富士ヒノキ」が採用された。3棟をつなぐガラスのカーテンウォールとのコントラストが美しく映える。左手の鳥居は浅間大社の施設の一部だ。(写真撮影：平井広行)

建ての展示棟は全体が逆円錐型の木格子で覆われ、正面の水盤に投影される景観は「逆さ富士」を表現している。展示棟の内部は螺旋状のスロープになっており、壁面に映し出される富士山の風景を楽しむながら疑似登山を体験できる仕組みだ。照明は必要最低限の照度に抑えられ、全長一九三メートルのスロープをたどりながら、確かに山道を登っている感覚を味わった。

この「登山道」を登り切った最上階は自然光があふれる展望ホールだ。正面ガラス越しに雄大な富士

山の絶景を堪能できる。ここから再びスロープを下る。途中には五つのテーマごとにまとめられた展示ゾーンがあり、サインページやタッチパネル、多彩な展示資料で富士山の知識を深めることができる。「四つの基本方針のうち最も力を注いでいるのが『守る』です。富士山の普遍的な価値を世界と次世代に伝え、継承していくということ。もちろん展示や調査研究、情報発信にも取り組んでいます。保護、管理といった分野が最も重要な活動であると当館では考えて



2階には74席の映像シアターがあり、4K映像で雄大な富士山の風景を堪能できる。歴史や文化を概観する映像プログラムも好評だ。(写真撮影：平井広行)

った特別企画展『富士山絵画の正統』（二部構成）では、葛飾北斎の肉筆画が展示される。こちらも佐久間象山（一八一〜一八六四）の賛が記された名品だ。更に、年末から登山道の変遷に着目し調査してきた成果を披露する企画展『富士山と須走口』も予定している。

こうした学術的なイベントの背景にも、富士山の普遍的な価値を伝えるというコンセプトがある。更にそこで得られた知識が、富士山を敬う、あるいは畏れるという意識の醸成につながっていく。文化的、学術的なイベント、研究活

動は、富士山の保護、管理とループを描くように連関している。「開館当初、元文部科学大臣の遠山敦子館長と『博物館や美術館は完成した時が一番充実していて、その後は手を抜くと展示の陳腐化、施設の老朽化は避けられない。そうならないように進化し続ける博物館として頑張りましょう』と語り合ったものです。今後も当館の意義を忘れることなく、その志を貫いていきます」と落合氏は気を引き締めている。

スロープを登るに従い投影される富士山の風景も低地から高山地帯まで刻々と変化していく。時折、登山者の影が現れ、来館者の影と寄り添うようにスクリーン上で同道するイメージが演出される。



日本人の心の在り方を伝えたい

そもそも富士山が世界文化遺産に登録された根拠は「信仰の対象と芸術の源泉」だ。信仰を生み出した霊峰であり、葛飾北斎の『富嶽三十六景』に代表される芸術の源泉として世界に影響を及ぼしてきた。その価値を伝え、山を守る。富士山世界遺産センターで「保護・管理」が最大の使命になることは理にかなっている。

富士山を守り、管理する。そのため、センターの展示方針は知識の伝播もさることながら、イメージの共有に力点を置いているように思えた。スロープをたどる疑似登山でも、前半の「登山」では、壁面に投影される山頂からの眺望、森や岩場の風景は臨場感にあふれ、それは美しいものだ。御来光の映像に手を合わせる人もいるという。

その一方で「伝える」「交わる」「究める」という博物館本来の機能を強化、充実させる取組みにも果敢に挑んでいる。「下山」する時に立ち寄れる展示ゾーンは、山岳

信仰をテーマにした「聖なる山」、人と富士山の未来に着目した「受け継ぐ山」、そして美術文学関連の「美しき山」といった文化的なゾーンに加え、火山としての富士山を捉える「荒ぶる山」、駿河湾に至る生態系を紹介する「育む山」といった学術的な展示コーナーも設けられている。落合氏はこう語る。「来館者にご協力いただいたアンケートから、富士山の自然、生態系などについてもっと知りたいという声が聞こえてきます。そうしたご要望に応えていきたい。現在、富士山一帯の地層を展示している『育む山』のコーナーを、年末の休館日を利用して拡充する予定です」。

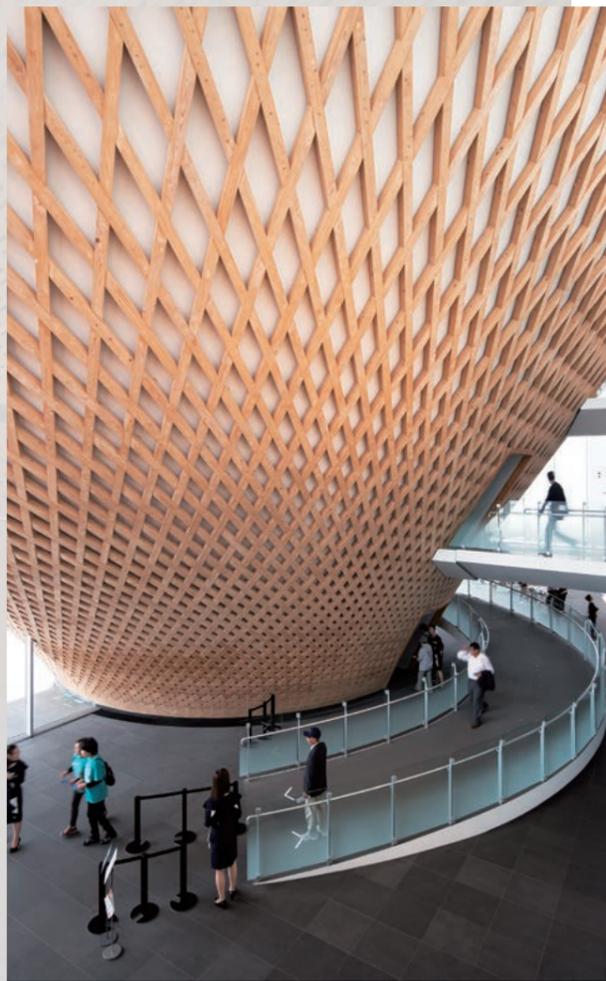
常設展に加え、美術展など企画展の実施にも意欲的だ。直近では八月下旬まで『富士山に迫る』展が開催された。目玉となったのはセンターが所蔵する江戸時代後期の日本画家・谷文晁の『富士山中真全図』。二丁に及ぶ巻物で、江戸幕府十一代将軍・徳川家斉（一七七三〜一八四二）の花押が押された一級の美術品だ。「歴史的に



入口を入るとすぐに疑似登山体験を楽しめるスロープへ導かれる（右）。いわば屋内の登山口だ。登山道＝スロープの途中には所々に展示ゾーンが設けられている。「育む山」（上）では今後、高山帯から駿河湾までの生態系を紹介し、富士山の自然についての展示を強化していく。付近の地層標本などが展示されている「受け継ぐ山」（下）には、来館者の自筆メッセージも披露されていた。

価値のあるものなので購入した逸品です。多くの方に見ていただきたい。建物が完成してこの七月で一年が経過し、湿度や壁面からの有機物の数値も安定してきたので、

美術品の特別展も開催できるようになりました。今後、年に二回ほど企画していきたいと考えています」と落合氏は抱負を語る。取材時に北館のギャラリーで開催中だ





ステンレスパイプのオブジェが天空にそびえるエントランスゲートは、このエリアのランドマークだ。隣接する大阪市立科学館に加え、今後建設される大阪中之島美術館、舞台芸術センター（仮称）と一体となり、芸術文化の発信拠点を目指す。

地下に整備された現代美術の殿堂

淀屋橋から中之島の一角は大阪を代表するビジネス拠点の一つだ。そのオフィス街の一角に巨大なオブジェが天空に向けてそびえている。国立国際美術館のエントランスゲートだ。

一九七〇年に大阪で日本万国博覧会が開催された際、世界各国と国内の美術品展示を目的として会場内に万国博美術館が建設された。この建物は万博の終了後、パビリオンが撤去され、万博記念公園として整備された跡地で再利用されることになる。一九七七年に同地で国立国際美術館として開館し、現代美術の収集、企画展を中心に運営を続けた。しかし、開館から二〇余年、老朽化、所蔵庫の狭隘及び交通アクセス等の諸問題が顕著になったことから新築移転計画が浮上する。一九九九年に中之島で新館建築工事に着手。二〇〇四年に竣工、再開館したのが現在の国立国際美術館だ。

国立国際美術館

新たな美術の地平を拓く。



国立国際美術館副館長兼学芸課長 中井康之 Yasuyuki Nakai

完全地下型。前述した地上部のオブジェは「竹の生命力と現代美術の発展・成長」をイメージして設計されたエントランスゲートで、この施設のシンボルになっている。このゲートの下に地下三階、延床面積一万三、〇〇〇平方メートルの美術館が建設された。つまりオブジェ周辺の地上広場は美術館の屋上といえる。ゲートをくぐるとすぐにエスカレーターで地下一階のミュージアムショップやレストランがあるフロアへ導かれる。更にその下、地下二、三階が展示室及び収蔵庫といった構造だ。各階は連続的な吹抜けになっており、地下とは思えない解放感に満ちている。

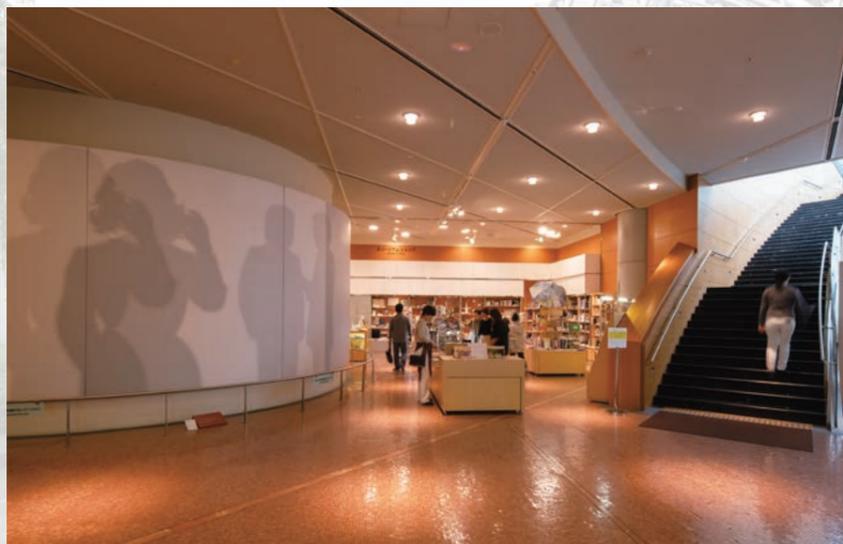
都市から放射される現代美術の息吹

国内外の現代美術作品を中心とした作品約八、〇〇〇点を収蔵する国立美術館として年間五〇万人程度の来館者を迎えている。

そもそも現代美術とはどういうものなのだろうか。一般的には第二次世界大戦後の美術で、抽象表現主義、ポップアート、ミニマルアートと、時代の変遷とともに新しい地平を切り拓き続けているとされる。同館の中井康之副館長にお話を聞いた。「その概念を一言で説明することは非常に難しいのですが、現代美術は作品に触れてワクワクする、心が躍る美術として捉えていただきたいと考えています。その現代美術を多くの人に知っていただく。それがこの美術館の大きなミッションの一つです」。

施工を担ったのは銭高・鴻池・大本特定建設工事共同企業体。(株)銭高組の資料によると、掘削工事には周辺地盤、山留の変形量を最小限にとどめるため、通常とは逆に上層階から打ち下げていく逆打ち工法が採用された。堂島川と土佐堀川に包囲された中洲の地盤は多くの地下水を含んでいるため、地下躯体の外壁の外側に堅牢な外防水を施し、湿気、地下水の浸入を防いで貴重な美術品を守っているという。

吹田市の万博記念公園で開館していたころの入場者数は特別な年を除いて年間五万人程度。当時、現代美術はまだまだハードルが高い分野だった。都市部から離れて



ミュージアムショップの入口の壁面を飾るのは1960年代から70年代を中心に活躍した美術家・高松次郎氏の作品《影》(1977年)だ。



地上階のエントランスロビーとミュージアムショップやレストランがあるB1フロアはエスカレーターで結ばれている。自然光が降り注ぎ、地下とは思えない解放感がある。



二人組の美術家・アローラ&カルサディーラが生み出したパフォーマンス作品「Lifespan」。40億年以上前の太古の石と3人の現代人が対峙する約15分間の作品だ。体の動きと吐息、口笛などで、言語が誕生する以前のコミュニケーションのあり方を表現している。パフォーマンスの確保など課題は少なくないが、今後の現代美術のあり方と、その収集、展示、公開の可能性を示している。(画像提供：国立国際美術館)

アローラ&カルサディーラ「Lifespan」2014年 国立国際美術館蔵
© Allora & Calzadilla Courtesy Lisson Gallery 撮影：福永一夫



鑑賞プログラム「こどもびじゅつあー」の様子。一つの作品に向き合い「見る・考える・話す・聞く」能力を育む教育はアクティブラーニングの一つとして注目を集めている。発言がどんなに稚拙なものでもあっても否定はせず、自らの感性を大切にしながら、根拠をもとに自分の考えを述べ、他者の考え方も尊重することが前提となる。国立国際美術館では、子どもたちに向けた実践と並行して、全国の教師を対象とした研修などを通じ、鑑賞教育の普及に努めている。(画像提供：国立国際美術館)

国立国際美術館は、作品の展示のみを目的とした施設ではない。現代美術という常に斬新であり続ける分野の最先端を発信し、これを人々と結びつける役割を担っている。「どうすればより開かれた美術館たり得るのか、日々考えています。単なるエンターテインメントの場ではない、人が創造したものを真剣に楽しみ、広げ、後世に伝えていく、そうした装置でありたいと思います」。最後に中井氏はそう話してくれた。

発信することがこの美術館に課せられた使命だと、中井氏はこう付言する。「また観てみたいと思わせるものでなければ優れた美術とは言えません。しかし、現代美術にはポピュラリティを獲得した時から、本来の現代美術ではなくなっていくという考え方がありません。この美術館には、常に新しい魅力的な現代美術を発見、発信し続けていくことが求められていると思います」。

パフォーマンス作品の紹介もそうした取組みの一つだ。同館はこの春、開館四〇周年事業として記

念展『トラベラー まだ見ぬ地を踏むために』を開催した。展示作品の一つが『Lifespan』と題されたパフォーマンス作品だ。三人のパフォーマーが天井からつるされた太古の石に向き合い息を吹き掛けたり、口笛を鳴らしたりしながら交信するという作品。プエルトリコを拠点に活躍してきたアーティスト・アローラ&カルサディーラが生み出した現代美術作品だ。同館は一昨年度にこの作品を購入した。形があるのは小さな自然石と楽譜のみ。「形を持たないパフォーマンス作品を『収蔵』

して『展示』するという例は海外でもまだ珍しいことです。パフォーマーが変われば作品の印象も大きく変化します。刺激的な一期一会の芸術作品です」と中井氏は話す。その偶発性も現代美術の一端なのかもしれない。気軽に立ち寄ることができる都市部にその出会うの場がある意義も大きいだろう。更に力を入れている活動が子どもを対象とした「鑑賞教育」の普及だ。国立国際美術館では小学校から高校の見学受け入れとともに、「こどもびじゅつあー」といった鑑賞プログラムを通じて小中学生

が、たまたま訪れてそのインパクトに驚く、感動するといった出会いもまたよいものです。そうした意味では現在の立地は大変理想的だと思います。会社員の方々が昼休みに来館し、時を忘れて鑑賞されていることもあり。楽しく、刺激的に現代美術に触れるためには、やはり都市部にその拠点を置

くということが大きな利点になるのではないのでしょうか。

美術と真剣に、楽しく向き合う開かれた美術館

一昔前と比較して現代美術の認知度は上がり、国立国際美術館の来館者数も順調に推移している。その現代美術の可能性を持続的に



B1からB2の吹抜けには国内外のアーティストの作品が展示されている(上)。B2とB3の展示フロアを結ぶ動線にまで自然光が届く(左)。展示室に関してはB2の一部は自然採光が可能だが、B3は人工的な照明による展示となっている。